



広島 田中講平 作陶展 広島そごう 美術画廊にて 2004.10.3

10月3日 萩焼の田中講平先生の広島で開かれていた作陶展に家内と二人で出かけました。出展された作品のかもす落ち着いた味わいをゆったりと鑑賞。すっかり 気分のリフレッシュして帰りました。

この田中講平先生の幾つかの作品の肌に「ほたる」が飛んで「萩」の素晴らしい味わいをひきだしていました。萩焼の技法のひとつと聞いていましたが、「ほたる」をこんなに意識して色々鑑賞したのは初めてで、材料屋の私にとっては 興味深々で田中講平先生にも会場で色々教えてもらいました。この「ほたる」に すっかりうれしくてこの一文かきました。

2004.10.20. Mutsu Nakanishi



萩焼きの肌に舞うほたる



作品の肌に「ほたる」が舞う田中講平先生の作品  
 広島 田中講平 作陶展より 2004.10.3.

### 「萩焼に舞う ほたる」

萩焼の素晴らしい味わいを引き出す「ほたる」という技法 正式には御本手焼というらしい。

萩焼の肌のあちこちに赤みがかった輪がまるでホタルが光っているかのようにほつほつと飛び、「ほたるが飛ぶ」と表現される。赤みが濃い場合には「もみじ」と表現する場合もあるという。

この「ほたる」は窯の中で起こる窯変の一種で中々制御できないものだと長く思っていました。田中講平先生にこの技法について色々うかがって、その奥深さを聞いてまたビックリ。



田中先生 いわく

「 窯の中できっちり制御はできないにしても、作品のイメージの中に取り込んで、緻密に技法としてアプローチする。偶然に起こる代物ではない。 」

「 素焼前の生の状態で別の土で化粧がけをし、窯の技術を駆使制御してこの「ほたる」を作品の表面に飛ばすのですが、窯から出したときに思い通りにできた時の喜びは 「いいホタルが飛んだね」と満足感で一杯 」と……………。

萩焼では「ほたる」の技術ひとつにしても 陶芸家それぞれの「素地のデザイン・美しさ」と「化粧がけの妙技」・「窯の技術」のコンビネーションがその作風を生み、作品の素晴らしい味と個性を生む。

化粧がけの仕方や窯の温度・雰囲気・作品が置かれた場所など窯の状態ではうまく飛んだり飛ばなかったり…………

イメージどおりには行かず、時にはまったくほたるを飛ばせなかったり、また 予想もしなかった味わいを作品に引き出すこともあるという。

試行錯誤の中から、陶芸家それぞれが作風として習得される技法と聞きました。



材料技術屋の私にとっては 「ほたるが飛ぶ」そのメカニズムは興味深々

「ホタルのとんだ赤い輪 ひとつひとつに、ポツンと微小な点があり、これがホタルを飛ばす原動力」とそっと教えてもらいました。

「萩の七変化」といわれる味わいと奥深さを生むひとつの要因として、この「ほたる」の奥深い技術をちょっと覗かせてもらった気がしています。

田中講平先生の作風の代表のひとつ「列状文」もまた、施された凹凸の文様と化粧がけなどの技法が萩の素地とほどよく調和し、窯の中でさらに磨かれて、作品の素晴らしい地合い・色合いを生む。

「ほたる」や「列状文」の技法が 作品の中でよく活かされ、「田中講平先生の萩」を味わい深いものにしていて勝手に想像しています。

やっぱり 偶然では何もできないのですね。

「萩焼に ほたるが飛ぶ」美しい言葉とその響き

この言葉に田中講平先生の作品を重ねて 数々の作品の素晴らしさに見入って、満ち足りた気分で広島から帰ってきました。

やっぱり 萩はいいですね。

2004.10.3.

田中講平作陶展を見て

Mutsu Nakanishi